

東の国 から心

小泉八雲◎著

恒文社

平井呈一◎訳

東の国
から心

小泉八雲◎著
恒文社
平井呈一◎訳

译著

原国籍为英国的著名作家小泉八雲的散文集



© 1975

東の国から・心

定価二、三〇〇円

一九七五年二月一〇日 第一版第一刷発行
一九八六年五月一〇日 第二版第一刷発行

著者 小泉八雲

訳者 平井呈一

発行者 池田恒雄

発行所 株式会社恒文社

〒二一〇 東京都千代田区三崎町一〇〇

電話 (販売部) 〇三二二三八〇一八一
(出版部) 〇三二二三八〇一六四

振替口座 (東京) 五一三五八二四

印刷統計印刷工業(株)
製本 飯塚製本

落丁・乱丁の場合はお取りかえいたします。

1095-002013-2273

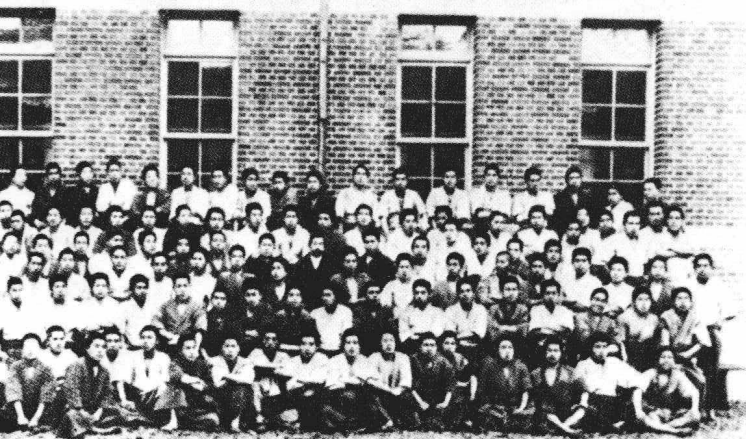
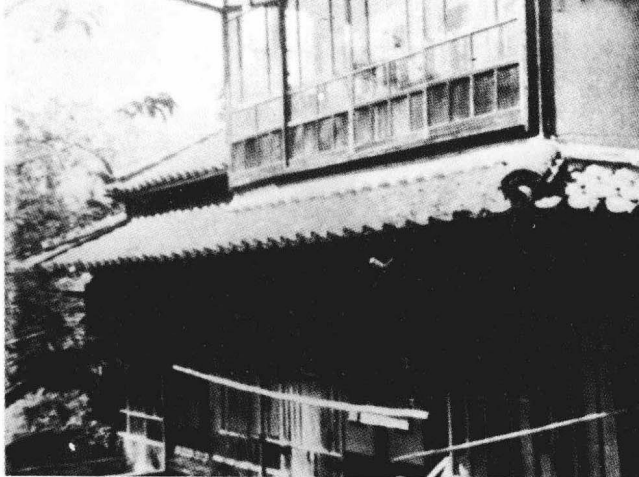


写真 ㊦ 熊本で第五高等学校の生徒たちとの記念写真(部分) 前列中央が嘉納治五郎校長、その左やや側面を向いているのがハーン、校長の右が秋月胤永氏。

㊦ 同じく五高卒業記念写真、前列右から二人目(白服)がハーン、中央が秋月氏。

㊦ 嘉納校長をかこんで五校柔道部の人々「九州の学生とともに」「柔術」など参照

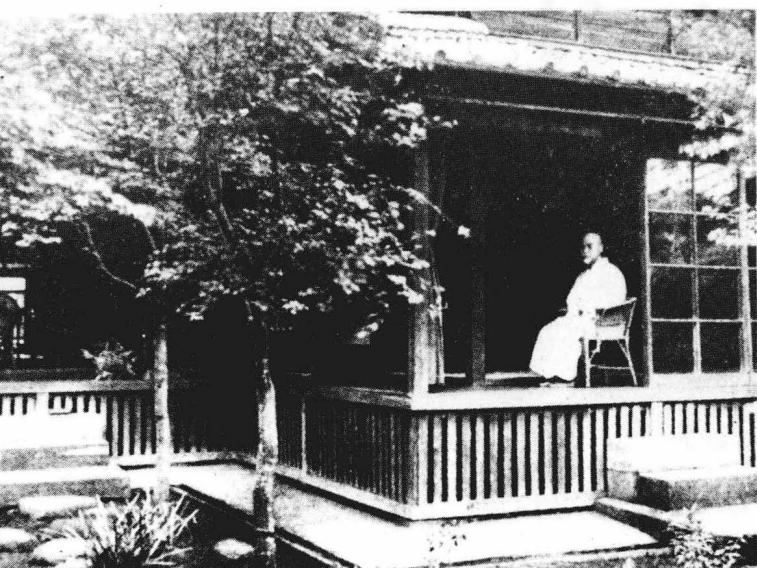
—小泉一雄氏所蔵—



真 ① ⑥① 熊本堀端の旧居
—小泉一雄氏所蔵—

④ 同上の庭

⑤ 熊本手取本町の旧居 (人物は
家主で教子であった赤星典太氏)
—丸山学著「小泉八雲新考」所載—



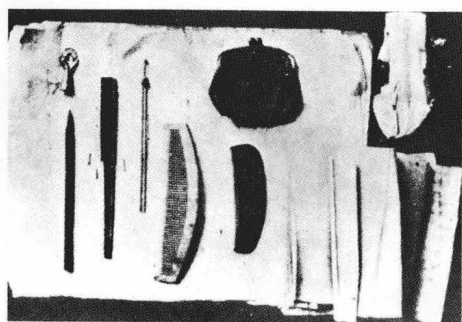


写真 ㊦ 富山勇子像—小泉一雄氏所蔵— 当時ポルトガルの雑誌セロエズなどにも掲載
 ㊦㊦ 京都末慶寺にある勇子の墓。㊦㊦ 勇子の遺品—沼波瓊音著「大津事件の烈女 富山勇子」より—
 [本巻「勇子」第8巻「京都紀行」参照]
 ㊦㊦ 横浜の地藏堂〔「横浜で」参照〕—小泉一雄氏所蔵—

東の国から・心

目次

東の国から

夏の日の夢	五
九州の学生とともに	三四
博多で	七九
永遠の女性	九五
生と死の断片	一三八
石 仏	一七〇
柔術	一九七
赤い婚礼	二五二
願望成就	二九二
横浜で	三二五
勇 子 ―ひとつの追憶	三四三

心

停車場で	三五六
日本文化の真髄	三六三

門 っ け	三九三
旅 日 記 か ら	四〇一
あみだ寺の比丘尼 びくに	四二三
戦 後	四三九
ハ ル	四五九
趨 勢 一 瞥	四七〇
因果応報の力	四九九
ある保守主義者	五一三
神々の終焉	五五一
前世の観念	五六四
コレラ流行期に	五九四
祖先崇拜の思想	六〇三
き み 子	六三九

装幀・朝倉 撰

東の国から

— 新しい日本における幻想と研究 —

「西と東が離れているほど遠く――」

出雲時代のなつかしいおもいでに

西田千太郎へ

夏の日の夢

一

夢の日の夏

その宿屋は、わたくしには極楽のように思われた。そして、その女中たちは、まるで天女かなんぞのように思われた。というのは、ちょうどその時わたくしは、近代的設備ならなんでもそろっている、ゆっくりと手足ののばせるようなヨーロッパ風のホテルはないものかと思つて、この国のある開港場へそれをさがしに行つて、じつはそこからほうほうのていで逃げ出してきたところだったからである。そんなわけで、その宿屋のゆかたにくつろぎ、ひんやりとした当りのやわらかな畳の上にあぐらをかいて、すずしい声をした女中たちにかしずかれ、きれいなものに身のまわりをかこまれながら、ゆっくりと足腰をのばしたときには、まず、十九世紀のあらゆる心労からほっと救われたような思いがした。朝の膳には、竹の子とハスの煮つけが出た。それから、極楽のおみやげに、うちわを一本くれた。そのうちわには、波打ちぎ

わに、大きな波がひとつどんと白く砕け散っている上に、あざぎ色の空へむらむらぱつと舞いあがっている、チドリチドリの絵がかいてある。この絵ひとつを見るだけでも、わざわざここまで出かけてきた旅の苦勞を、きれいさっぱり忘れるだけの値打があった。みなぎる光り、人を威圧する壮大な生動、汐風の凱歌、——この三つのものが、渾然と一幅の画中にとけあっている絵だ。それを見たとき、わたくしは思わず、あつと快哉を叫びたくなつたくらいであった。

二階ざしきの縁がわの、杉丸太の柱のあいだから、海ぞいの、くすんだ色をした美しい町の家並が、ひと目に見わたされる。碇をおろしたまま、うつらうつら眠っているような幾そうかの黄いろい帆かけ舟、見上げるばかりの深緑の断崖が両がわから迫りよつたあいだにひらけている入江の口、そのむこうに、はるかかなたの水平線まで、いちめんにぎらぎら光り輝いている夏の海。その水と空と相つらなるあたりに、さながら古い思ひ出を見るように模糊として打ち霞んでゐるあいたいとした山のすがた。そうしてしかも、くすんだ色のその町並と、黄いろい幾そうかの帆かけ舟と、深緑の断崖とをのぞいたあとは、なにもかも、天地はただひとつの紺碧に塗りこめられているのである。

そのとき、恍惚としたわたくしの瞑想のなかへ、ふと風に鳴る風鈴ねの音のようなすずしい声が、しとやかな挨拶のことばを奏でだした。わたくしは、その声の主が、この玉楼おかみの女将おかみだとすぐに心づいた。おかみは、茶代の礼を言いにあがってきたのである。わたくしは、さっそくおかみのまえに手をついてあいさつをした。おかみというのは、まだごく年の若い、それこ